

芦北の旅

上水敬由

「うたせ船のお客さんですか」

白いゴム長を履いた五十年配の女性から芦北漁協の前で声をかけられた。

そうだとすると、乗る船は四〇メートルほど先の二隻目だと教えてくれた。

クルマをさきにやっておいて、ぶらぶらと岸壁を乗船ポイントまで歩いて行った。

桜も散ったというこの時期、空は晴れわたっているが風が冷たい。

うねりはそれほどなさそうだが、沖は小さな白波が立っている。

ほぼ年寄りばかりのにぎやかな客（われわれのことだ）よりは若く見える船長さんとさきほどの女性（どうやら船長の奥さんらしい）、それにたぶんわれわれと同年輩の乗組員のおっさんが迎えてくれた。

「午後はあたたかくなるでしょう」

船長さんが慰めるでもなく教えてくれる。

舳先から渡された木の板を踏んで、飲み物を入れたクーラーボックスと一緒に船に移る。

黄色いライフジャケットは装着してみると簡易な防寒具としても役に立つようだ。

四本の帆柱がよつきりと立った船のやや後方に位置する操舵室から前方にむけて日よけ（もしくは雨よけ）が取りつけてあり、いざとなれば海に不慣れな連中がすがりつけるように配慮してある。

客がめいめい適当なところに腰を据えると、船は岸壁を離れた。

離れた、と思ったあたりで幹事役から声をかけられた。

「どうしましょう」

なんでも地方紙の記者が船長さんに船上でのインタビューを予定していて、この船に同乗させてもらいたいと頼みこんでいるらしい。

船長さんはケータイを持ったまま困った顔をしているし、ふり返れば若い男が岸壁でなにやらバタバタと騒いでいる。

「お断りします」

年に一度の旅を新聞などに利用されたくはない。

インタビュウなら陸上ですればいいし、どうしてもというなら身銭を切ればいい話だ。なにより他人の遊びに便乗しようという姑息な考えがつきあいかねる。

そんないきさつで生じたいやな気分も、突堤から外海に出

て船が北上を始めるとまたたく間に消えていった。

上空を一羽のトビが舞っている。カモメは見あたらない。

前方左手に天草上島の龍ヶ岳や倉岳が連なり、その向こうに青く霞んで雲仙普賢岳が顔をのぞかせている。

船酔いの薬（缶ビールともいう）をあおりながら、右手に白く光る芦北海浜総合公園の海水浴場をながめていると、漁の準備をするので気をつけるようにという声があった。

見ると乗組員のおっさんが、舳先近くに横たえてあった長い丸太を船首にむけて突きだそうとしている。

奥さんと一緒に、くくりつけてあった細めのロープをほどこいて持ちあげ、コロの上を定位置まで滑らせ切り込みに合わせてロープで固定する。

それから、年寄りの酔っ払いがケガでもしてはマズイので、滑車やロープやワイヤーに十分気をつけるようにと、われわれに念入りに注意した。

漁場に着くまでの間にやっておくべき作業もいろいろとあるものだ。

やがて、はるか北東に八代の製紙工場の煙が見えるあたりで船は停止した。

ここで船べりから漁網を海中に流し込む。

船の前後で平行を保つように長さを調節しながら、足元の杭にかけたりほどいたりを繰り返して、全体を流し込むのに慎重に時間をかける。

今年最初の漁ということもあり、漁網がよく乾いているので軽くて扱いが楽だという。

うたせ船のシーズンは例年、ゴールデンウィークから十一月までだそうで、われわれはすこし早く来すぎたのかもしれない。

ようやく流し込み作業が終えたところで、いよいよ帆を張るのかと思ったら、一枚だけそれも三分の一ほど引きあげて固定してしまつた。

「今日は風が強いので」

船長さんがちよつと申し訳ないようにことわりを入れた。観光ポスターにあるような、大きく開いた白帆の画を期待してやってくる客が多いのかもしれない。

そんな客の思惑はともあれ、潮の流れと風の力で漁網を引くという、世のエコロジストが泣いて喜ぶような漁法なので、自然の顔色をうかがいながら操船を行わなければならないのだ。

さあこれから始めるぞという合図も何もなく、うたせ船が風下に向かって静かに漁網を引きはじめると、船長さんがわれわれに太刀魚釣りを勧める。

船上での昼食予定時刻まで一時間以上もあるし、ほかにすることもない。

長い釣り針の根元にテグスでキビナゴの首を巻いてある。

おっさんの指示に従い、五〇メートルほどの深さがある海底まで一気に下ろしてから、釣り糸を船べりに沿わせて両手でたぐりあげる作業を延々と続ける。

「釣れない……」

しばらくすると飽きてくるので、交代しながら続けるが、

やはり釣れない。

太刀魚もほかに用事でもあるのだろう、年寄りにかまっている暇はないらしい。

それでもあんまりかわいそうだと思っただのか、最後の最後になって八〇センチばかりのヤツが一匹だけかかってくれた。

おかげで、何となくみんながほっとしたところに、奥さんが大皿に盛った料理を運んできた。

刺身やエビのフライやシャコの塩ゆでや、エビの身の詰まった歯ごたえがある薩摩揚げなどを味わいながら、ふと思いつ出したのは、数年前にある雑誌で、誰かがウサギの文様を取り上げていて、それを読んで感じた小さな疑問。

残念ながら（いつものように）論の詳細は覚えていないし、肝心の雑誌もどこかに行ってしまったのだが。

あの「因幡の白ウサギ」に言及しないのはなぜだろう。誰でも気づくように、沖の島からくろぐろとしたワニの背を飛び越えてくる白いウサギのイメージは、暗い海にたつ白波そのものではないか。

ウサギが白くなければならぬ理由はきっとそこにあるの
に。

などといったものだが、そもそもそんな（どうでもいいよ
うな）感想を抱いたのは、以前に明治時代の学生たちの文章
を読む機会があったからだ。

『龍南会雑誌』は旧制第五高等学校の校友会誌で、明治三十
一年に発行されたその第六十四号（から複数字にわたって）

に「端艇部第二回遠航」という報告がある。

いまでいうボート部の無鉄砲な連中が、冬のさなかに熊本
市内の江津湖から川を下り有明海に出て、八代海から不知火
海を経て水俣まで往復するという、まったくもって無茶な話
だった。

ちょうどわれわれが波間に漂っているあたりを、彼らは胸
を青春の客気に満ちあふれさせながら漕いで行ったのだ。

そのときに使った端艇＝ボートは、日清戦争で海軍が戦利
品とした十二桡カッターを譲り受けたもので、その名を「大
連」という。

この譲り受けについては、以前に夏目漱石との絡みで一度
書いたことがある。

ロシアとの戦いの気配が国内に充満しつつあった時代。
若者の心も端艇部の活動もそういう色合いに染まらざるを
えなかつたのだ。

ところで、ウィキペディアによれば、十二桡カッターとい
うのは艦載艇の一種で救命艇の役割を備えた、左右両舷に六
本ずつ、計十二本のオールを使って航走する大型の手こぎボ
ートのことだという。

サイズについて全長九メートル、全幅二メートル四十五セ
ンチ、深さ八十三センチとあるのはおそらく全日本カッター
連盟のサイトを参照したのだろう。

ちなみに、連盟ではいまも定期的に競技大会を開催してい
るが、その際は「艇長、艇指揮 各一人、漕ぎ手 十二人
計十四人」で参加することになっている。

それをこの「遠航」では、よくあることだが、予定していた十七名に「病気または事故」があいつぎ、よせばいいのに八名で決行することになったらしい。

つまり艇尾や艇首で舵を取ったり指揮をするふたりを除けば、本来必要とされる人数の半分で、沿海とはいえ荒れがちな冬の海を漕いでいかなければならないのだ。

いくら何でも、先行きの想像はつきそうなものだが、「いずれも劣らぬ猛者の面々、寒さ知らずのつわものなれば、気炎万丈、談笑の声は家も崩れんばかり」で、「門出の祝いに一酌せんとひとりと言えば、げにもつとものことと、衆議たちまち一決」という脳天気さ。

それからの（予想どおりの）すったもんだについては、あまりに長くなるので、省略させていただくことにする。

さて、白ウサギに話を戻すと、「遠航」のはじめの方で連中のカッターが有明海を南下して三角に向かう場面。

「『勅任官が来た』と叫ぶものあり。たちまちにして艇は崩れんばかりに震動しぬ。けだし大浪の頂、白泡をかぶる。その外見、勅任官の礼帽のごとし。これより白浪を称して勅任官という」とある。

勅任官の礼帽なるものの画像を探してみると、黒いつば広帽子の左右を頭頂に向けてむりに折り曲げくつつけたような形をしており、くつついたところに白い羽毛のような大きめの縁飾りを前から後ろまで帯状に縫いつけてある。

彼らがどこで勅任官の姿を目にしたか、いまのところ定かではないが、なるほど、これをみれば白浪を連想してもむり

はない。

そういう記憶があつたところに、ある雑誌で（まったくはつきりしない話だが、たぶん）月光を浴びながら野を駆けていくウサギの文様について書かれていたものだから、なぜだろうと勝手に思ったわけだ。

それだけのことだ。

うたせ船の漁の結果はというと、残り物のアシアカエビと小ぶりのタイが一、二匹、あとは小魚ばかりで、まあどうしようもない。

港に戻って、恐縮しきりの船長さんたちに世話になった礼を述べると、やや潮の引いた岸壁をクルマまでまたぶらぶらと歩く。

すこしばかり風は冷たかったが、いい天気であうねりもなく、年寄りが骨休めのひなたぼっこに出かけたと思えば（日焼けはしたが）世話はない。